

九州地方のゴキブリ類の分布状況 (予報)

菊屋 奈良義*

Distributon of Cockroaches in Kyushu, Japan (Preliminary Report)

Narayoshi KIKUYA

はじめに

九州におけるゴキブリ類の生息分布に関しては、朝比奈(東京)による新種記載、黒佐(東京)による採集報告、分布資料などによるほか、短報に類する報文が多い。図鑑、解説書類などには種別に分布地を記載する形式でとりまとめられているが、その記載内容は必ずしも実情に適しているとはいえないものがある。これは、九州産ゴキブリ類に限らず野外性ゴキブリ類全般に関する継続的、生物地理学的研究者が少なく、かつ、ゴキブリ類研究者が殆ど「衛生動物」「医動物」としての概念において、ゴキブリ類の研究を進めているからであろうと考えられる。

筆者はキムラグモ *Heptathela Kimurai* KISHIDA 研究のため、九州を回訪しながら林縁、林内、林床などで複数のゴキブリ類と遭遇し、朝比奈正二郎博士の指導をうけて九州産野外性ゴキブリ類の地理的分布について1975年以来記録を集積して来た。今回、朝比奈博士の指導のもとに、1991年4月20日現在での中間報告としての取りまとめを行い、分布の概要を記録することにした。

本報文をとりまとめるにあたり、常に調査に同行し、または積極的に生息状況調査に協力下さっている足立高行(大分市)、倉品治男(別府市)の両氏に深く感謝の意をあらわす。また、貴重な標本を御恵与下さった佐々木茂美氏(大分県在住)にも誌上を借りて厚く御礼申し上げたい。また、本報文取りまとめまで、種の同定、分布資料に関する助言など、御多忙な日々にもかかわらず終始御指導を賜わった朝比奈正二郎博士と、本報文の掲載を心よく御同意賜わった日本家屋害虫学会の

* 大分野生生物研究室(870 大分市東八幡6-3-1)

諸先生がたに深く感謝の意を表する。

調査地の概要

九州本島及び屋久島を主たる調査地とし、豊後水道西岸沿いの一部の離島をも含めてゴキブリ類の生息分布記録を部分的に集約し、九州地方における生息分布の概況を明らかにするため1991年4月20日現在までの知見資料によって一時的取りまとめを行い、予報とする。

九州地方は30°12'N~34°N, 129°20'E~132°Eに所在し、南北に約430km, 東西に約250kmの範囲に位置し、島弧変動(藤田至則, 1970)のブロック化の模式(松本隼夫, 1973)によると、肥前~豊前ブロック、豊前~豊後~筑後ブロック、中央構造線ブロック、北薩~南薩ブロックの四ブロックの島弧変動が、ほぼ鮮新世後期に始まり現在に及んでいる地殻変動を示している。地質構造では西南日本内帯に中国帯、西南日本外帯に四万十帯が主要部を占め、ほぼ中央部を東西に中央構造線が貫走している(寺岡他, 1971)。

九州地方の気候帯は西側に九州気候区、東側に表日本気候区、北東部に瀬戸内気候区に大別されるが、海中気候区分では亜熱帯(杉村他, 1988)、陸上気候区分では年低温温帯(鎮西清高, 1988)に属している。九州地方の植生領域に注目すると、その潜在自然植生はヤブツバキクラス域が殆どを占め、一部高地にブナクラス域が点在している(宮脇昭, 1983)。また、現存自然植生では代償植生域が殆どの地域を占め、ヤブツバキクラス域及びブナクラス域は極めて一部に点々と保全されてはいるものの垂直分布、水平分布共に変化に富んだ遷移途次植生などが認められる(宮脇昭,

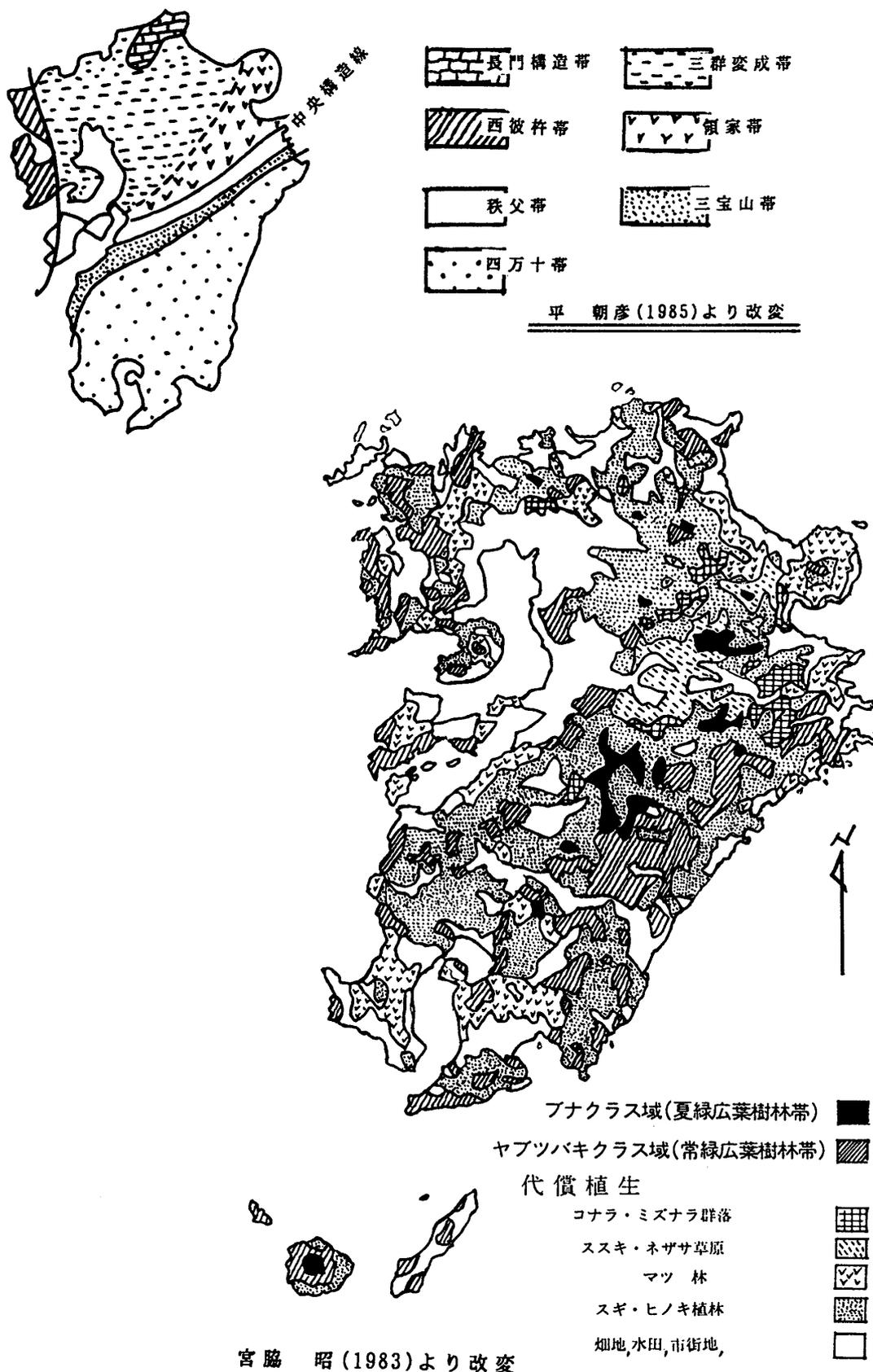


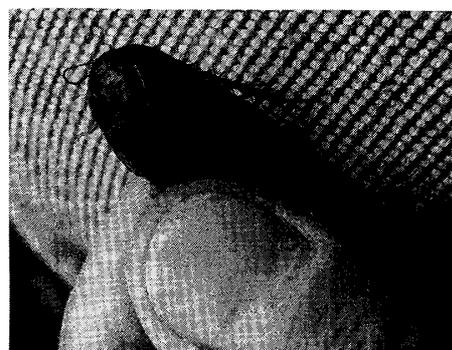
図1 九州地方の特徴(概念図)



マダラゴキブリ幼生の半水生生活をおくる溪流環境（川岸汀線）
（鹿児島県栗野町佃川支流）



濡れ砂の中から出てくるマダラゴキブリ幼生



全身砂まみれだが実は「半つやけし」状

図2 ゴキブリ類のフィールド調査状況

1983)。

九州地方の現存自然植生のうち、その主要なものを例示すると、海岸林から相観により、マサキ、トベラ、ハマビワ、ウバメガシなどの海岸低木林、ヤブツバキ、アラカシ、コジイ、スダジイ、タブ、アカガシ、イスノキなどの典型的な照葉樹林（その殆どは二次林であるが）、標高900m前後を下限としてモミ、ツガ、ケヤキ、シオジ、ミズナラ、ブナなどの針葉樹林及び夏緑林がそれぞれ成立している。アカマツ林は広く乾燥尾根などに成立し、クロマツ林は海崖、海浜などに成立しているのが

一般的である。自然植生は相観による限り、その植生域範囲を漸減し、人為植栽によるマツ・スギ・ヒノキ林に転換され、野生動物の生息環境に人為干渉が徹底的に及ぼうとしている。九州地方では、食植性のゴキブリ類が自然植生に従属性を示す傾向を知見し続けているだけに、地史的歴史をもつ昆虫の生息環境との従属性を明らかにするフィールドとして、九州地方は国内でもすぐれた地域であるとの評価にたつて、この地方を調査研究の場とした（調査地の特徴は図—1・2にとりまとめて掲記した）。

調査方法

1. 主として目視,手捜し(いわゆるハンドソーティング)によった。筆者が九州地方のキムラグモ (*Heptathela kimurai*) の個体群研究を継続しているため, キムラグモの Habitat Population を調査するにあたり, その生息地周辺の自然環境の概要を調査記録する機会を利用した。従ってゴキブリに関しては方形区調査などによらないで, アトランダムに手捜しし, 林相, 倒木, リター, 林縁部のマント-袖群落などに対する目撃調査を主とした。生息種, 生息環境, 出現個体数, 出現個体の生活令(推定)などに注目した記録によって, 九州地方の分布概況を知ることが主たる目的であったから定量的調査方法を避けた。また, リター, 林床に対する生息種調査では1目5m/m×5m/m程度の網目をもつプラスチック製のカゴを用いてシフトする方法と, リターをすくい取りの上, 持ち帰ってツルグレンによる72時間照射法を併用した。

結果と考察

1975年以降, 九州地域のフィールド調査により1991年4月20日現在までに生息分布を視認したゴキブリ類は次の3亜目7科, 12属, 20種である。

(註) 分類は日本産昆虫総目録(九大平嶋1989)によった。

ゴキブリ科 Blattidae

- ワモンゴキブリ *Periplaneta americana*
- コワモンゴキブリ *P. australasiae*
- トビイロゴキブリ *P. brunnea*
- クロゴキブリ *P. fuliginosa*
- ヤマトゴキブリ *P. japonica*
- ウルシゴキブリ *P. jappa*

チビゴキブリ科 Anaplectidae

- クロモンチビゴキブリ *Anaplectella japonica*

ヒメクロゴキブリ科 Chorisonneuridae

- ヒメクロゴキブリ *Chorisonneura nigra*

チャバネゴキブリ科 Blattellidae

- チャバネゴキブリ *Blattella germanica*
- モリチャバネゴキブリ *B. nipponica*
- ヒメチャバネゴキブリ *B. lituricollis*
- ウスヒラタゴキブリ *Onychostylus pallidolus*

lus pallidolus

キチャバネゴキブリ *Symploce japonica*

キスジゴキブリ *S. striata striata*

ツチゴキブリ *Margattea kumamotoensis*

オガサワラゴキブリ科 Pynoscelidae

オガサワラゴキブリ *Pynoscelis surinamensis*

マダラゴキブリ科 Epilampridae

サツマゴキブリ *Opisthoptilia orientalis*

マダラゴキブリ *Rhabdoblatta guttigera*

オオゴキブリ科 Panesthidae

オオゴキブリ *Panesthia spodica*

クチキゴキブリ *Salganea taiwanensis*

(註) 朝比奈(東京)らによってキョウトゴキブリ *Asiablatta kyotensis*, サツマツチゴキブリ *Theganosilpha satsumana*, ほか3種, 計2科, 5属, 5種が, それぞれ報告されているが, 筆者はまだ九州本島及び屋久島において自ら視認していない。従って本報文では調査結果を厳密にとらえ, 現地踏査~視認によって生息分布を確認した20種にとどめた。

これら20種について, 筆者が目撃し, 採捕し, 朝比奈(東京)によって同定した結果を参照して同定した結果, 各種ごとにゾーニング出来る範囲で分布地域を示したものが図3・4である。

図3・4に示したゾーニングは一地方で5ポイント以上の確認があり, 植生, 森林形態, 地形, 人類文化地形態などから経験的に判断してゾーニングしたものである。従って区分したゾーニングエリア全域を, くまなく踏査したうえで分布を確認したのではなく, その点, 知見資料をもとにした若干感覚的なゾーニングであることを, あらかじめおことわりしておく。

以下, 図3・4によって, 掲記したゴキブリ類の地理的分布状況に関し, 調査結果をとりまとめながら, 若干の考察を加える。

(1) ワモンゴキブリ

九州各県の温泉地, 温熱排水溝や浄化槽内に適応している。集中的な Habitat Population を形成する種で, 1975年6月24日大分市内の集合住宅

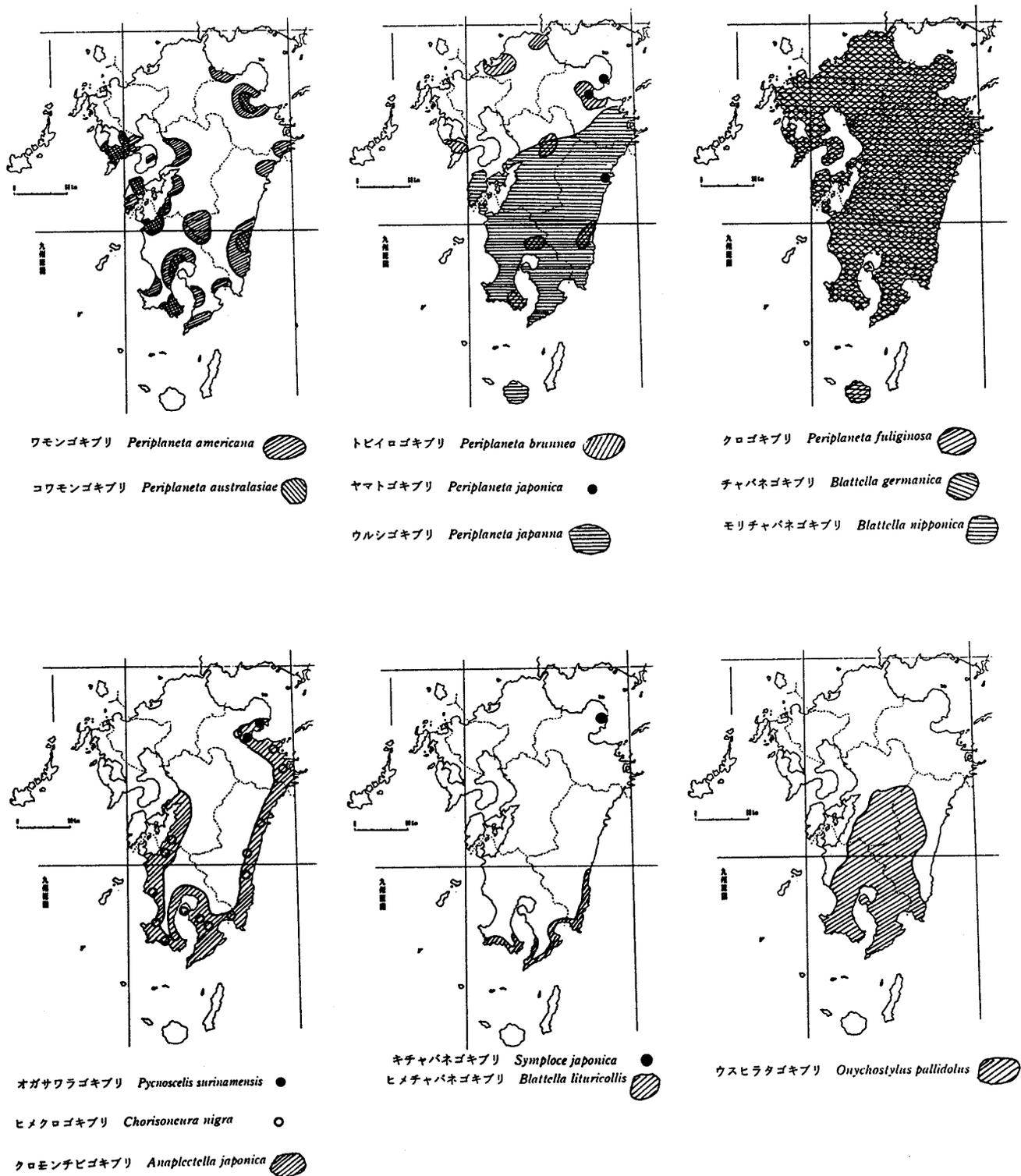


図3 九州におけるゴキブリ類の分布

地の公共下水道において、筆者らにより発見された個体群をはじめ、鹿児島県指宿市、熊本県水俣市などの温泉排水溝を中心として確認事例が続く、衛生害虫の異常繁殖として注目されている。大分県下、別府市における追跡調査(1975年8月)

では、温水排水溝の上流側にあった大規模な温泉熱利用熱帯植物園が、別府市における全域拡散の基点となっていることを知見した。これは下流域から遡行調査をすすめた結果同植物園につながる温水排水溝によって確認されたものである。都市

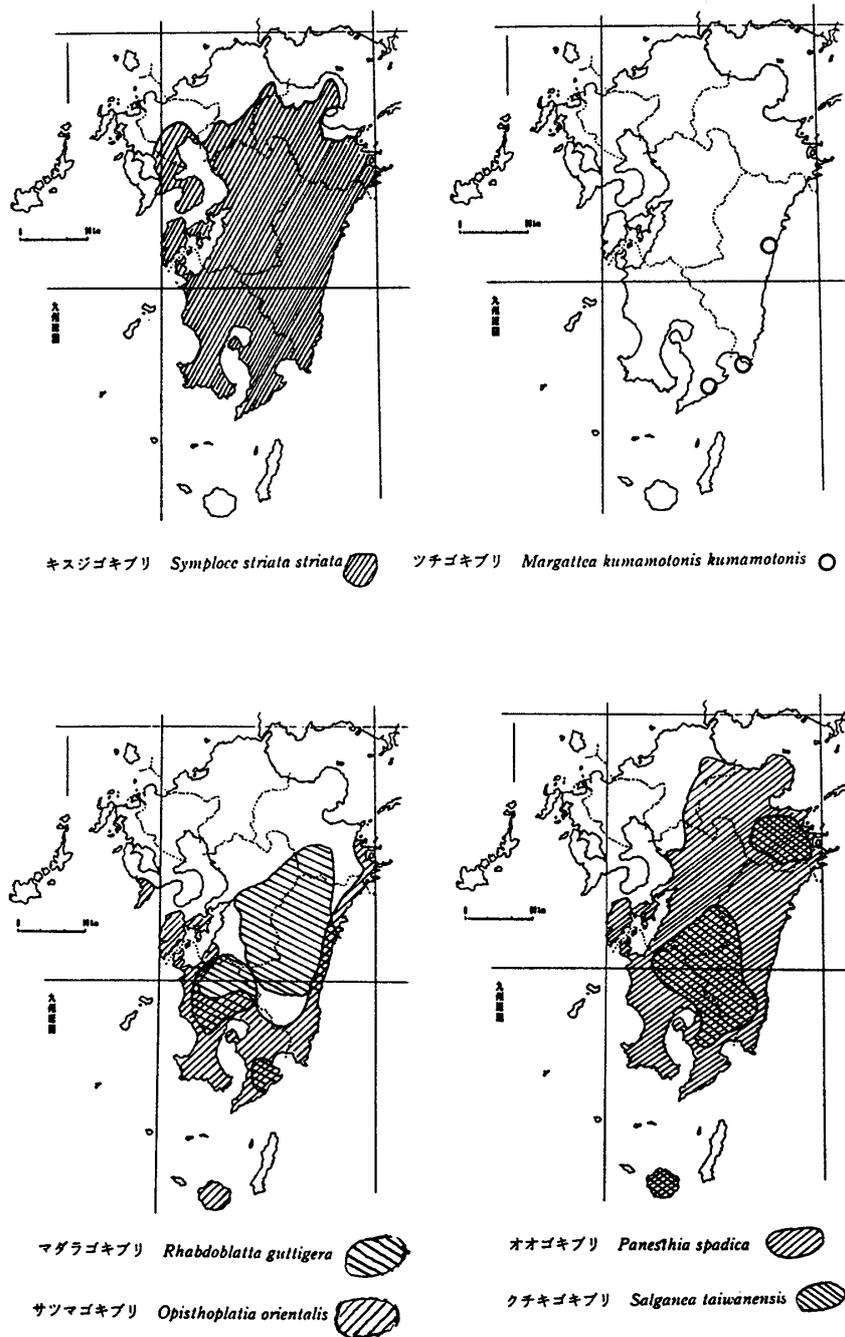


図4 九州におけるゴキブリ類の分布

や観光地における下水道整備の進捗につれて、下水道内部に流入する温熱排水量の流水に対する比率は増加し、下水溝暗渠内の平均気温の上昇が予想されるだけに、この種の地理的分布が拡大される原因は極めて人為的なものであると考えられる。住環境整備が人為的利用感覚だけを基本として設計される以上、ワモンゴキブリの Habitat Population は国内で Species Population にまで拡大する予想はたやすく、このため本来の自然推

移を無視した都市環境の管理は、特に偏った生態系の偏重として検討する必要があるものと考えられる。

(2) コワモンゴキブリ

1976年9月、大分県大分市に所在する全国的チェーンのスーパーのテナントにおいて、九州で初見して以来、九州本島の都市化された市街地のビルで集中的な生息分布を確認した。確認例のう

ち共通的環境要素と認められたものに業務用カレールー（固型、ダンボール箱梱包）がある。ある特定の業務用カレールーの空箱に限って集中的な Habitat Population が形成されていた。同じ現象は九州地方、四県六都市の同系列スーパーのテナントで目撃されているから業務用カレールーメーカーか、その流通基地などが分布拡大にインパクトを持つことが推察される。

この種の分布状況に関しても、人為的要因による地理的分布拡大が主たる拡散原因と考えられることは、前記した新知見地での知見状況から肯定的であろう。併せて特定の Habitat Population 形成地を基点とした拡散は、エアコンダクト、調理用排水溝、ケーブルダクト、ダムウェイターダクト、床面、天井裏などを中間径路としてビル内に拡散し、ビルの構造上必須となる排水溝、下水溝、開放通路などによって地域に拡散するルートが典型的である。拡散したコワモンゴキブリが定着し、地域に適応するか否かについては、基点となったビル周辺の排水溝などの、温排水量と溝内温度とが大きな要因性を持つものと知見されているが、この報文では触れない。

(3) トビイロゴキブリ

九州で初見は1977年5月13日、大分県別府市に所在するゴルフ場のクラブハウス内、浴室脱衣場である。その後北九州のビジネスホテル、病院群、博多の市街地ビル群、長崎のホテル群など計8市街地で知見した。比の種の特徴は、夏季を越えるのと知見しがたくなる傾向が見受けられることで、その理由などに関して筆者は追跡出来ていない。

然しながら、この種がワモンゴキブリ、コワモンゴキブリなどとは、生活上の環境対応に明らかに異なる要素と対応していることがうかがわれ今後の課題の一つとなる。

(4) クロゴキブリ

九州全域に生息している。ことに市街地ビル群では飲料水槽（高置給水槽、受水槽）、湧水槽、汚水槽などに適応し、その水際線周辺に好んで産卵する傾向が見うけられる。屋内型種の九州代表的種であるが家具、押入れなどの産卵行動は筆者

らの体験的知見でも50年以上、同じ行動が見うけられたが、槽類に適応したのは1978年別府市で初見して以来、増加する知見例である。九州全域の生息という事実は一般的に知悉されているが、山間部や僻地の農家では農機具小屋、家畜棟、納屋などに生息し夜間飛来する行動習性を示す。一般的に九州で生活する農民はクロゴキブリを「アブラムシ」「アマメ」などの方言で呼び生活域の昆虫と理解している。九州地方の山間、僻地のいたるところで知見され、標高900m前後を垂直分布限界とする生息分布が認められる。筆者は大分市西郊、高崎山麓で育ち、薪小屋のクロゴキブリの産卵などの記憶があり、従ってクロゴキブリは昔から九州に定着した昆虫であると理解していた。長じてクロゴキブリが帰化種と教わったが、この点が、誰にただすべくもない疑問点として残されている。感覚的にはあるが、昭和初期以前の流通経済の状況等を勘案しても、山間僻地の農家に体験的に知見されていたことなどを併せ考えると「原産種？」として理解するべきであろうと考えられる。北米と日本（緒方ら、1985）、環太平洋温帯部（朝比奈、1981）の分布解説など、多様な解釈の原点となった解説について、朝比奈（1981）の記述のように「原産地不明」から積極的に環太平洋温帯部原産と解し、西南日本定着種と考えてもいいのではなかろうか。この点について筆者の感覚的論拠は幼時体験と、現在の常緑照葉樹林帯林縁部リター、倒木などに本種が生息する知見とが併せて判断基準となっていることを付記する。

(5) ヤマトゴキブリ

本州分布の日本原産種とされている種であるが、大分県東国東郡武蔵町所在、大分空港貨物ターミナルで1976年10月、大分市駄の原所在西大分港埠頭で1976年10月、別府市南石垣所在国際観光港埠頭ターミナルビルで1981年8月、宮崎県日向市所在カーフェリーターミナルビル売店で1986年9月、いずれも1～3個体が発見された。全地点ともに流通基地的存在であり、かつ爾後の再発見なども知見されず、一時的侵入（移入）分布と考えられる。但しカーフェリーなど流通機構、宅配便などの流通形態や、これらがもたらす流通速度短

縮などに注目すると本種の分布拡大は、すくなくともここ10年程度の短期間で相当の拡散が予想されるのではなからうか。

(6) ウルシゴキブリ

筆者が本種を初見したのは1978年5月、大分県臼杵市所在、津久見島のスダジイ林林縁部の酸性凝灰岩礫とオニヤブソテツ、ダンチク落葉内にいた個体である。その後の調査では、現段階では熊本県三角半島と大分県佐賀関半島を結ぶ仮定線以南で、ごく普通に知見される種である。ことに常緑照葉樹林の林縁部を中心とし林縁から林内に20mほどのリター層、林内のギャップ周縁のリター層、倒木などに生息していることが認められる。

鹿児島県始良郡栗野町、熊本県水俣市小津奈木での、いずれも2月初旬～3月初旬の知見ではカナヘビの越冬穴に12～20個体が同居し越冬中であることを知見している（足立高行、倉品治男、筆者、1990、1991、未発表）。コジイ林、スダジイ林、イチイガシ林、イスノキ林、アラカシ林、等の再生照葉樹林に従属性が認められるかの知見が多く、今後、この種の環境指標性を追究したい。

(7) クロモンチビゴキブリ

1984年9月27日、大分市所在西寒多神社のイチイガシ林内で初見。ヤブツバキ、コジイ、ヒサカキ、クロキなどの低木層空間を飛翔し、3～4秒飛翔しては低木枝葉に静止し、再び飛翔するという行動をくりかえしていた。1回の飛翔距離は4～5mで、飛翔高度0.6～1.8m、目撃例のうち最長飛翔距離は8.5m、最高飛翔高度は2.7mで、静止行動の場合は、ヤブツバキの葉裏がもっとも多かった。この種は、その後大分市東部の坂ノ市所在、日吉神社のコジイ林、佐賀関町のコジイ林、佐伯市城山のコジイ林、宮崎県日向市のウバメガシ林、同高鍋町のアラカシ林など、九州本島南部を中心に沿海部で分布していることを確認した。1979年10月に宮田彬（大分医科大学）がライトトラップで、1950年10月に黒佐和義（東京都在住）がビーティングで、それぞれ採捕した記録があり稀少種かと考えられていたが、前掲の沿海域に所

在する常緑照葉樹林帯の低木層空間では、9月～10月にかけて最も目撃できる種であり、出現期に偏りがあったため採捕例が少なかったのではないかと考えられる。本種も、その生息が目撃できる森林環境に共通性が認められ、今後、環境指標種として追究する必要があるものと考えられる。

(8) ヒメクロゴキブリ

1988年6月28日、大分市所在、^{いすわら}柞原八幡宮のコジイ林で初見した♀個体、1989年7月18日、大分県南海部郡鶴見町鶴見崎のウバメガシ林で佐々木茂美（大分県在住）が採捕した♂個体を再見したほか、1950年6月黒佐和義（東京在住）により佐伯市で採捕された記録もある。従来に記載では主として柑橘類の枝葉で採集されているが、常緑照葉樹林の再生林内でも6～7月には目撃される。個体数は少ない。前種と同じく常緑照葉樹林中どの組成種と結びつくか指標性を追究したい種である。

(9) チャバネゴキブリ

今では日本全国分布種として知られている。九州地方では九州本島、屋久島ともに人類文化地（都市型集落地）を主要分布地として生息している。然しながら、例えば熊本県八代郡泉村の川辺川流域などまでは侵入分布が認められない。宮崎県東臼杵郡椎葉村上椎葉などの小規模密集集落地では、まれにスーパー型小売店舗で散見される。九州地方で筆者の知見した限りでは都市型集落地に従属性が強く、ビルなどエアークントロールシステムを持つ建物空間や温熱機器周域を好んで生息する種と思える。都市型集落地郊外にある自販機、エアークントロールシステムのない和風建物では、購入、仕入品など流通システムによる侵入は認められても、一時的な個体群増殖が認められるだけで、直ちに終熄する傾向が強い。特異な事例ではあるが、大分県下の地方町村（人口18,000人規模）で、町内の民家にチャバネゴキブリが異常に拡散した。1978年夏、保健衛生機関と共同でこの原因を追跡調査した結果、養鶏飼料会社在庫倉庫→農業実習用鶏舎→生産卵パック→町内スーパー→市民家庭のルートが確認され、実習用鶏舎

の飼料倉庫の在庫期間を短縮することと、生産卵パック室の切りはなしなどの環境要素コントロールによって、ほぼ4ヶ月で町域のチャバネゴキブリ分布を極限的に減少することが出来た。この体験からも流通システムが昆虫類の人為的分布にはたす役割りは今後注目すべきものがある。

(10) モリチャバネゴキブリ

九州地方では全域分布種と考えられる。チャバネゴキブリも全域分布と考えられているが特定の環境要素を要求し、特定空間を指向する性質があるのに比して、モリチャバネゴキブリは標高0m~1,000mにわたって屋外型の生活型を保ちつつ平均的に生息分布している。福岡市天神町のパーキング場外柵に沿ってヨモギ、チガヤ、セイヨウタンポポ、チカラシバなどが生育している局地草地、別府市北浜のデパートビル西方裸地に生育する地這性草本群落、その他、九州地方の至るところで容易に目撃される。この種の生息環境は都市型、農耕地型、林縁型などの区分はあてはまらず、リター層類似環境があればいいと考えられる。但し、森林内ではクローネのギャップが大きい場所ほど個体群密度が高いことは、これまでに知見された特徴であり、やはり環境指標性を追究すべき種であろう。

(11) ヒメチャバネゴキブリ

日南地方で初見して以来、日南市平山の海岸クロマツ林、南郷町市木のクロマツ林、宮崎市一ツ葉、鹿児島県大崎町、内之浦町、佐多町、大根占町、指宿市、開聞町など、いずれも海岸クロマツ林、トベラ-マサキ林、で生息を視認している。クロマツ林に従属性があるのか、海岸低木林に従属性があるのかを継続調査したい種である。

(12) ウスヒラタゴキブリ

鹿児島県肝属郡内之浦町岸良、姫門神社周域のマテバシイ林にある人為崖に生育するコモチシダの葉間で1985年6月30日に初見。以後、垂水市猿ヶ城溪谷のイワタバコの葉間で、牧園町新川溪谷のアラカシ林、宮崎県児湯郡木城町大瀬内林道のコジイ林、西米良村越野尾、熊本県八代郡泉村など

で生息分布を認めた。一見モリチャバネゴキブリに似て頭胸板（前胸背）が半透明なので容易に区分できる。これまでの調査資料では、むしろ内陸部の常緑照葉樹林帯林縁部のマント群落に従属性が認められるようである。

(13) キチャバネゴキブリ

1989年4月15日、大分県東国東郡国東町の鉄筋3階建校舎屋上の雨水排水溝バースクリーンに漂着したクロマツ及びタブノキの枯枝に静止中の個体が初見。雲仙でも採捕されている（朝比奈、私信1990）とのことであるが現在では海岸クロマツ林、タブ林、海浜漂着物を対象に継続調査中である。

(14) キスジゴキブリ

現在のところ九州北西部を除いて一般的に知見される種である。低木層、草本層、自然崖袖群落などの樹枝葉の間でビーティングによりよく採捕される。環境としては陰樹林に属すが、通風、陽当り良好で、やや乾燥気味の枝葉間に目撃することが多い。陰樹林の環境指標性をもつ傾向が認められ継続調査中。

(15) ツチゴキブリ

1990年7月、宮崎県児湯郡高鍋町蚊口浦クロマツ林内の生活ゴミ投棄場所を手掘り中、偶然採捕した。そののち都井岬、内之浦町などで知見したにとどまり、地点分布記録にとどめておく。

(16) オガサワラゴキブリ

1988年8月、別府市観海寺のアラカシ林林縁の民家で東向き崖地斜面下の砂地壁ぎわを歩行。温泉排水溝の直近であり、定着性が十分考えられる（朝比奈、私信、1990）ものと見て継続調査中。

(17) サツマゴキブリ

1955年7月、鹿児島県肝属郡佐多町古里で初見。当時は種名も知らず「熱さましの薬」などと聞いて興味を持った程度であったが、その後1978年6月、大分県津久見市長目浦、1979年5月、熊本県牛深市加世浦、天草郡河浦町、天草郡倉岳町宮田、

1979年8月、大分県南海部郡鶴見町大島地下浦などで相次いで分布を確認した。爾来九州地方におけるこの種の分布については沿海性種であることを示す分布状況が認められる。ことにこの種の植生に対する従属性は、アラカシとオニヤブソテツのリターに最も顕著である。ウバメガシ林、トベラ-マサキ海岸低木林、ダンチク林、コジイ林、スダジイ林などの林縁部で、日当たり良好な通風乾燥地に多く知見される。内之浦町甫与志岳～垂水市高隅山地にかけては、伐採された溪谷ぞいに上流側まで分布が認められる特徴がある。

(18) マダラゴキブリ

1985年6月、鹿児島県肝属郡内之浦町岸良、湯ノ谷温泉で初見。爾来、1986年6月、鹿児島県垂水市猿ヶ城所在、おはん川流域、始良郡牧園町下中津川所在、和気神社周域、同栗野町、蒲生町、宮之城町、出水市、熊本県人吉市、水俣市などで知見した。宮崎県下～熊本県東部山地～大分県南部山地などではイチイガシ林、コジイ林、アカガシ林、イスノキ林、タブ林、アラカシ林、スダジイ林など、主として常緑照葉樹林に分布し、一部モミ・ツガ林にも知見される。この種の植生従属性については継続調査が必要であり、現段階では知見資料にも偏りがあるので、環境指標性が認められるものとして記載しておく。但し、本報文で特にこの種の幼生の越冬期に半水生種である特性が示されることを記載しておく。1991年2月宮崎県児湯郡木城町^{おせうち}大瀬内林道のアカガシ林林縁の溪流で、1991年3月鹿児島県始良郡栗野町佃川支流で、1988年1月、大分県南海部郡宇目町藤河内で、それぞれ採捕された幼生は朝比奈（東京在住）により本種の幼生と同定されたものと同一種であることが判明した。水際の石に落葉が流積した場所の水中で水没した石にへばりついている状態で知見されるが、水没した流積落葉の間にも越冬していることから水際～水中の幅広い越冬環境を示しているものと考えられる。

(19) オオゴキブリ

1974年11月、大分県日田市^{きざん}亀山公園のスダジイ根株で初見。爾来、宇佐市宇佐八幡宮社寺林のス

ダジイ、白杵市津久見島のスダジイ林など主としてスダジイの生育木に食入している例が多かった。然し知見例が増加するにつれて1978年5月、大分市九六位山経塚ではコジイ立枯れ樹に、1981年4月、南海部郡宇目町、大野郡三重町などでアカマツの松枯れ樹で、1982年7月、大分～福岡両県境の英彦山、犬ヶ岳でウラジロガシ、アカガシの倒木で、1991年4月鹿児島県屋久町麦生でマテバシイ倒木、栗生のサンゴの浜で樹種不明の漂着木（ ϕ 130cm）で採捕した事例が集積したが、これもまた常緑照葉樹林に従属性が認められる傾向が高い。アカマツの松枯れ樹1例はコジイ再生林に混交したアカマツであり、この点ケースバイケースでの判断が要求され継続調査中である。

(20) クチキゴキブリ

1989年11月以来調査中であり、オオゴキブリの生息分布と重合している予測は可能性がある。然しながらオオゴキブリと異って倒木の若干腐朽が進んだものやリター内でも発見され、この点、オオゴキブリよりも環境選択性に幅があるのかも知れない。知見資料も地域が限られているので、本報文では一部分布地域を掲記するにとどめた。

ま と め

野外性ゴキブリ類のフィールド知見などを集積して九州本島及び屋久島のゴキブリ類の分布をとりまとめた。この結果、①ワモンゴキブリ、コワモンゴキブリの生息分布地拡大に流通機構が干渉していること、②ヤマトゴキブリの分布拡散に交通手段の干渉が認められること、③オガサワラゴキブリ、ヒメクロゴキブリの大分県下生息分布が知見されたこと、④クロモンチビゴキブリが沿海照葉樹林帯で普通種であること、⑤サツマゴキブリが長崎～大分以南の沿海性生息分布を示していること、⑥マダラゴキブリの幼生が半水生生活型で越冬すること、⑦ウルシゴキブリの越冬はカナヘビの越冬穴で同居越冬すること、などの新知見を紹介した。

このような調査結果を検討し、野外生のゴキブリ類には森林の組成や遷移段階などに応じて、生活環境選択性に指向性が認められる傾向がある。

いわば、森林の群落組成や世代交替や遷移段階に従属性を追求出来る見通しがあるため、今後、これらの「環境指標性」について追跡調査がのぞまれる。

参 考 文 献

- 1) 朝比奈正二郎 (1977~1988) 日本産ゴキブリ類分類ノート VII, IX, X, XVI, XVIII. 衛生動物 **28**(3)~**29**(3).
- 2) 宮脇 昭 (1983) 日本植生便覧付図日本の現存植生図. 東京. 至文堂.
 - 3) 杉村 新ほか (1988) 図説地球科学. 東京. 岩波書店.